

光陰似箭

旧日本租界を訪ねて

(中国研究所理事) 大里 浩秋

前置き

戦前中国に設けていた日本租界の歴史を資料で調べると共にその地が現在どんな状態になっているかをこの目で確かめる作業を、勤務先の神奈川大学の共同研究として10数年前から実施し、去年退職した後もそれに関わって今に至っている。

周知のごとく、中国における日本租界は、日清戦争に勝った後の下関条約で長江沿いの重慶・沙市と上海に近い杭州・蘇州の4地に置くことを清国政府に認めさせ、かつ日本に先立つ50数年前から租界を置いた西欧列強が中国側に認めさせていた最恵国待遇によって、他国がすでに置いていた天津・漢口にも設け、さらに上海・広州にも置こうとして交渉がうまくいかずに断念し、また福州・厦門には置くことになったものの実際には開発に至らず名前のみに終わった。こうして西欧列強の後追いをし中国への経済進出の拠点とすべく長江沿いと東側の海岸沿いにできるだけ多くの租界を造ろうとしたのだが、当初は期待したように日本の企業や個人が出かけて行って租界の体を成していったのは辛うじて天津と漢口であり、また租界は名乗らなくてもイギリスを主とする共同租界に続々入り込んで日本人街を形成していった上海であった。

そして、皮肉なことに、また当然なことに、下関条約で日本独自の租界開発を期して設けたはずの4つの租界は、いずれも当時の日本の経済力や運営経験の不足から開発は容易に進まず、住む人は少なく草茫々の状態が長く続いた。そこで日本政府が力を入れたのは、日露戦争の勝利をきっかけにしてそれまでロシアが握っていた利権を奪い

取り、大連・旅順を租借地とし、南満洲鉄道会社に運営を任せ線路沿いの都市を鉄道附属地として、東北地区に利権を拡大することであった。前置きが長くなった。中国における日本租界開設初期の概観はこれ位に留め、以下には、ほんの印象記に過ぎないけれども、この半年のうちに大学の用事で中国に出張した際に足を延ばして眺めた旧租界の現況を紹介したい。

沙市・漢口・杭州での見聞

その一、今年3月に非文字資料研究センター租界研究班の同僚と江西省九江市（かつてイギリス租界が置かれた）を皮切りに、湖北省荆州市沙市と武漢市漢口の旧日本租界を見て回った。そのうち沙市は、筆者が行きたいと思って果たせていなかったところだった。残っている資料では開設は取り決めたものの何も手をつけずに名ばかりに終始したと書かれており、なぜそうなったのか、どんなところなのかを確かめたかったのである。

武漢から車で3時間の沙市に着くと、沙市の名前が付いた経済開発区が大きなスペースを占めて続いていて、そこは以前深圳の経済特区に進出した企業が人件費が安いことを理由に移ってきているところだと聞いた。さらに進んで、かなりの規模で続く市街地に入り、そこで地元の案内者を得て長江沿いに向かったおかげで、かつて日本を含むイギリス、アメリカなどの企業が寄り集まって各種の商取引を展開して「洋碼頭」（西洋波止場）と呼ばれていた場所を探し当てることができた。と言っても、旧租界なら残っていそうな西洋風の建物は何も残っておらず、裏寂れた土手でしかなかったのも、最初は疑心暗鬼だった。しかし、案内者が言う目印の亭や土手がそこにあり、私たちが持参した外務省通商局『在沙市帝国領事館管轄区内事情』（1924年）の記事や第三艦隊司令部編『揚子江案内』（1935年）中の地図を見ても、確かにここだろうとなった。

ところで、せっかく中国側に認めさせた日本租界を開発することで洋碼頭から独立した日本人の商業活動を展開できなかったのはなぜかと言えば、上記外務省の記録によれば、時折起こる長江の水害を防ぐに足る防波堤を造る費用が用立てできなかったからであるとする（しかしそうは書いていないが、多額の費用を使うだけの貿易利益を沙市では見込めないから独自の防波堤は造らなかったということかもしれない）。そして、日本領事館を始め進出した日本企業はほぼ洋碼頭に居を構え、そこに隣接する日本租界は草茫々のまま名のみを残したのである。今回上記の地図を頼りにその辺に近づくと、洋碼頭だったところに比べて一段と放置されていたらしいと感じる一帯が前方に広がり、そこが日本租界だったところと見当をつけることができた。飛んで日中戦争が起ると洋碼頭周辺に日本軍が駐屯したとのことで、そのせいであろうか。地元の研究者はおおかた洋碼頭



頭を日本租界と理解しているようであった。さも
ありなんである。

沙市から武漢に戻り、2005年に建物の保存状況を調べたことのある漢口旧日本租界の現況を見て回った。イギリス・ロシア・フランス・ドイツの各租界が並びそこに林立する建物群の巨大で堅固であるのに比べて、日本租界の建物が著しく見劣りするのは前の調査で分かっており、いずれその大部分は壊されることが予想されていた通りに、日本租界のはずれに位置する神社や日本式家屋があったあたりは、レストランやプティック等を中心とする「武漢天地」と称するしゃれた空間に様変わりしていた。が、それでもそこにあった建物を全て壊して新築したのではなく、民団小学校教員住宅を始め古い建物のいくつかは適度に活用されて残っていることがわかった。また、前には公開していなかった建物、例えば旧大石洋行のビルは修理を加えて今や「八路軍武漢弁事処旧址紀念館」としてオープンしていた。なお、沙市・漢口および九江調査の詳細は、神奈川大学『非文字資料研究』36号を参照のこと。

その二、7月初めには、杭州で開いた非文字資料研究に関するシンポジウムに参加した機会に、3回目の杭州旧日本租界見学に出かけた。1回目は1990年代のことで、その時は浙江社会科学院の老先生に案内していただきタクシーで現地に着いたのだが、老先生は日本人が旧日本租界をうろろろすると現地の住民にとがめられると心配されたようで、小声で話しながらそそくさと通り過ぎただけだったので、古い家並みを歩かされたという印象しか残らなかった。2回目は2000年秋で、その時は杭州大学の先生が付き添ってくれてやはりタクシーで現地に行き、古い見取り図を頼りに1時間ほど歩いて1周したので、1回目よりもよほど記憶に残った。そして今回は、前2回には運航していなかったはずの「大運河」を走る遊覧船に、

市内の発着点である武林門から6キロ、20分ほど乗って、拱宸橋で降りて旧租界に近づいた。この橋は明代に造られた石橋で今でも大運河を渡るのに利用されているばかりか、周辺の観光化の代名詞になっている名高い橋であることを今回降り立って実感した。ところが、その近くに租界を置いた日本人側としては、拱宸橋と言えは日本租界（日本人の言い方では、「日本居留地」）を指していたようで、筆者が解説している宗方小太郎の日記には、時々汽車で拱宸橋まで来て、租界内に泊まって周辺で鳥撃していることが書かれていて、その際の地名は拱宸橋と記すのみである。

さて、橋の上から租界の方角を眺めてすぐに気付くのは大運河沿いに公園風に木が植わり、歩道と車道が整備され、それ以外の場所には至るところ高層建築が建ち並んでいることだった。そこで、橋の袂から租界の方にしばらく歩いて行きながら、2回目に来た後に次のように感想文を書いたことを思い出した。「かつての租界は粗末な塀で囲われていてよくは見えないのだが、無理やり隙間から中をのぞくとまばらに小屋や木が見えるだけでまとまった建物はないうであった。そして塀にはこれから住宅用地として開発する旨の宣伝文句が書き付けてあった。……荒れるに任せた倉庫跡にしか見えない旧日本租界の敷地に、昔の租界の草茫々を重ね合わせつつ、そこもやがて見事な住宅群に変身するに違いないと思った」。



図3 杭州各国通商場に置かれた税関事務所

さらに日本租界に近づく前に同行の人たちと昼食を摂り、その席上で、そういえば日本租界に隣接して、より拱宸橋側に近い位置に中国側が設けたかつての「各国通商場」、今は病院になっている敷地内に古い建物が残っているという話になって、さらに租界の中に入るのをやめて、皆でその古い建物を見に行くことにした。めざす古い建物2棟は簡単に見つかり、そのうちの1棟は当時の外務省の記録によれば「税関理事府」の建物であることが分かった。外国との通商の場として中国側が設け、日本租界よりも多くの中国人が入り込んでにぎわったと言われる各国通商場には、当然にも税関を置き、何年かは不明だが早くにそのための事務所が建てられたはずである。

そして、この税関の建物の前には、「侵華日軍在拱宸橋繳械投降地」、「抗戦歴史紀念碑」と刻まれた碑が建っていた。その説明文には、「日本軍の拱宸橋に駐屯する部隊は1945年9月5日ここに集結して、国民党中央軍校第三分校の将兵に対し武装を解いて投降した。軍校将兵は直ちに日本の兵站と武器倉庫を接收すると共に、日本人を監督し彼らを日本に返す仕事の責任を負った。中国人民抗戦勝利七十周年を記念するに当たり、歴史を鏡として未来に向かうために、とくにこの碑を建てて紀念の意を表す。杭州市拱墅区人民政府拱宸橋街頭弁事処、杭州市拱墅区非物質文化遺産保護



図4 抗戦歴史紀念碑

中心、二〇一五年八月十五日」とあった。中国における抗戦記念日は9月3日だが、この記念碑の日付を8月15日にしているのは、日本の「終戦記念日」を意識した処置だったのだろうか。